

チベット中南部（パーリー—チュンビ溪谷）の自然

II. 動物

吉田 利男

信州大学農学部

The Nature of Central-Southern Area (Phari-Chumbi valley) in Chibet

II. The Animals

Toshio YOSHIDA

Faculty of Agriculture, Shinshu University

Key words: Chibet highland, Phari, Chumbi valley, Dung beetles

はじめに

パーリー地区は標高およそ4,300mのチベット高原に位置し、人口約3,000人、荒涼たる高原で、中央に小さな流れがあり、それから取水し、田畑を潤している。大麦とアブラ菜が緑と黄色の色彩を強くしている（写真-1）。住居は石積をセメントでとめ、大半が2階建てで、玄関の屋根には「悪魔よけ」の角をもつヤクの頭が飾られている（写真-2）。そして、燃料に利用するため、周囲の壁には地元の湿原の泥炭の角切を積み重ね、乾燥させている。木材は地元には無く、隣のチュンビ溪谷（高山帯から亜高山帯、標高3,500—3,000m）の木材をトラックで運び、供している。チュンビ溪谷はパーリー地区より峠を越えて南下し、亜東地区を経てインドに通じる。インダス川の源流域にあたる。このように、高原から森林地帯へと大きな環境の変化を示す地域がチベット中南部である。それ故、そこで見られる動物相も、単一から多様な動物相へと変化を示す。

今回の調査は当地での放牧家畜につくダニ相の解析であったが、予備調査なので、ここでは、これらの地区で観察した動物の主なものを紹介する。

放牧家畜ではヤクとウシとウマ、それにロバ、ラバとヒツジであった。チベットのロバ（*Equus kiang*）は世界でも現存の野生ウマの一つである。アジアには他にモウコノロバ（*E. hemionus*）がいる。ヤクは粗放な放牧で、人慣れしていず、付着・寄生しているマダニの確認は出来なかった。ウマやロバやラバは馬車として、使われている（写真-3）。標高が4,000mを

越すせいか、今回はこれらの家畜からはマダニの採集は出来なかった。パーリー高原では各家庭でチベット犬とニワトリが多数飼われていた。なかでも、冬から夏への移行期のせいか、白色レグホンの雌個体の脚には鱗の上に白色の羽毛が残っていた（写真-4）。高



写真-1

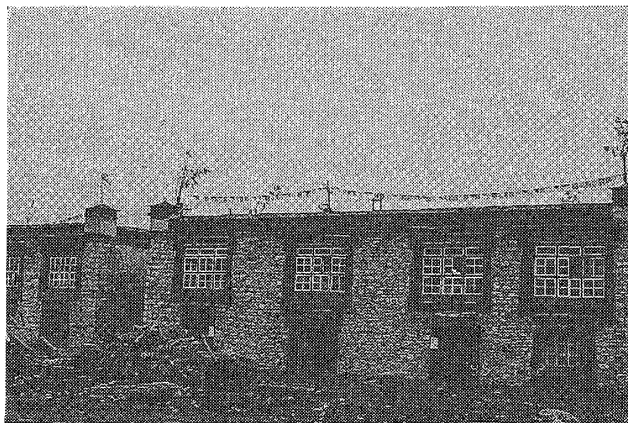


写真-2

標高地での冬季は厳寒な状態で、日本のライチョウのように脚にも冬毛がはえ、羽毛で保護しているのが判る。ネコはほとんど見られなかった。宗教上のせいかな？首都ラサ市でもイヌは多かったが、ネコは一匹見ただけであった。

野鳥ではヒバリとヤツガシラ（日本では迷鳥）が多く目についた。他に、カラスとハゲタカを見た。チベットは土葬・火葬はせず、鳥葬を行うので知られているが、高原の電線上に数羽のハゲタカを見ただけであった。

高原では季節の変わり目なので、澤沿いの植物（サクラソウの仲間やエーデルワイスなど）に花が付き始め、赤・黄色・白と鮮やかな色が目立つた。しかし、大半の植物はロゼット葉状の形態であった。開花した花に吸密にきている小型のチョウ（コヒョウモンモドキの仲間やシジミチョウの仲間）が目についた（写真-5）。

大型のチョウの飛来はまだなかった。他には、ヤクやヒツジなどの家畜の糞にセンコガネの仲間（日本のセンコガネよりは大型）が多数集まっていた（写真-6）。他に、エンマコガネやマグソコガネの数種



写真-5



写真-6

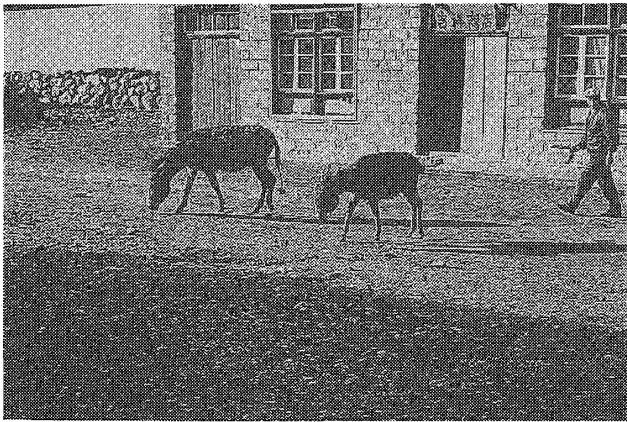


写真-3

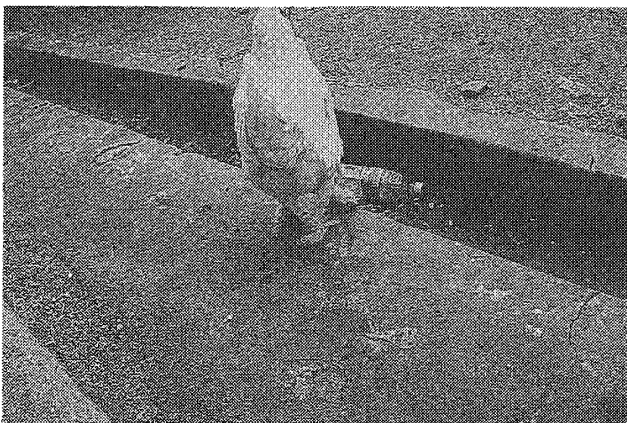


写真-4

が観察出来た。いわゆる「糞転がし」の「スカラベ」は見られなかった。チベットの住民たちは近くの山に行き「冬虫夏草」を多数採取してきて、売買をしているので、この季節に越冬しているコウモリガの蛹がいるのであろう。当然、秋に幼虫で地中に生息し、菌糸に寄生され、そのまま幼虫の形態で地上部に子実体を伸ばしているのである。これを中国に出荷し、商売としている。中国では、体力増強剤として利用している（写真-7）。

パーリー地区の高原から、「峠」を経て亜東地区（チュンビ溪谷）に入ると、山は緑が多くなる（写真-8）。そして、ヤクの放牧が目につく。標高3,500—3,000mに下ると、森林帯となる。ここをアートン川（チュンビ溪谷）が流れる（写真-9）。標高3,000mの区域で、写真に見られるようなマス（ブラウントラウトに似るが、体側に見られる大きな赤班点はイワナに近い）が生息している（写真-10）。亜東地区ではこれを釣って料理に使っていた。3,000mを越す地域であるが、この川を下ると、インドのインダス川に流れつく。インド洋からインダス川を遡上して陸封された天然の魚が放流されたものかは不明である。

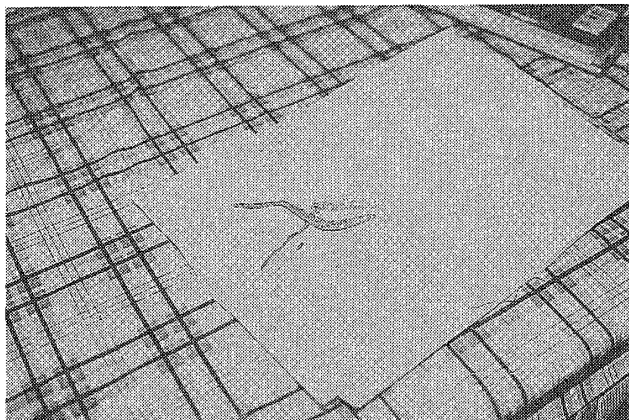


写真 - 7



写真 - 9

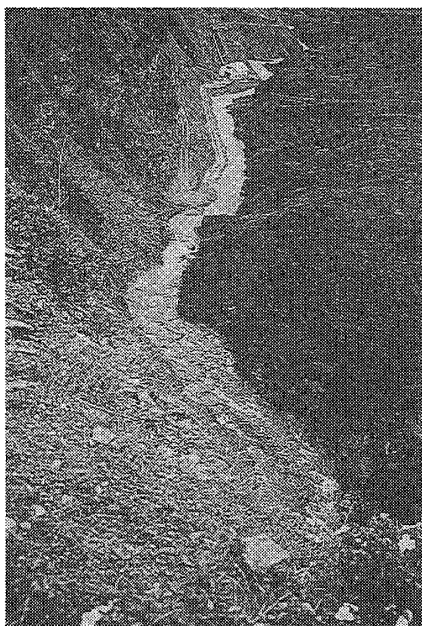


写真 - 8

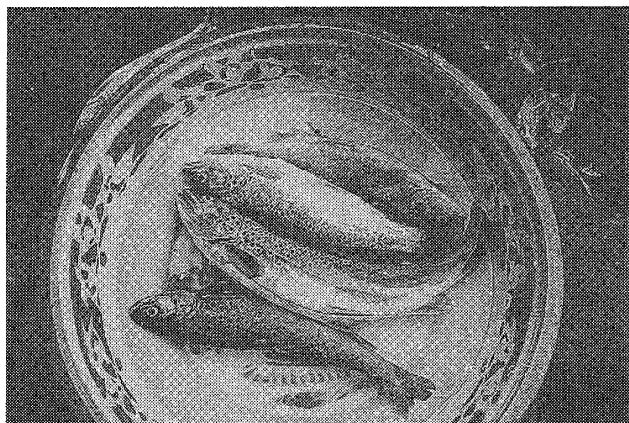


写真 - 10

（受付 1997 年 1 月 22 日）